

ボランティアの受入れ状況については、コーディネーターを配置していない施設より、配置している施設の方が多く受入れている傾向がうかがえました(図1)。

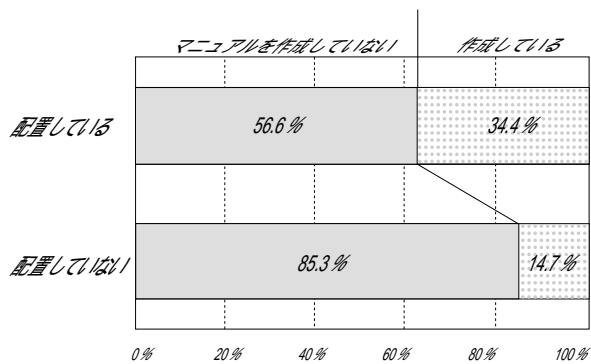
ボランティア受入れのマニュアル作成については、高齢施設が四八・九%、障害施設では十二・九%が作成していると答えています。全体としては、マニュアルを作成している施設でより多くのボランティアが活動しています(図2)。

ちなみに、コーディネーターの配置の有無によるボランティア受入れマニュアルの作成状況については、コーディネーターを配置していない施設に比べ、配置している施設のほうがボランティア受入れマニュアルを作成していることが分かりました(図3)。

この結果から、コーディネーターの配置や受入れマニュアルの作成等、受入れのための条件を整備することで、ボランティア活動が活発になっていくということが分かります。一方で、コーディネーターの多くは兼任であり、ボランティアを多く受入れれば受入れるほど業務が増し、その負担が増していくことも予測されます。

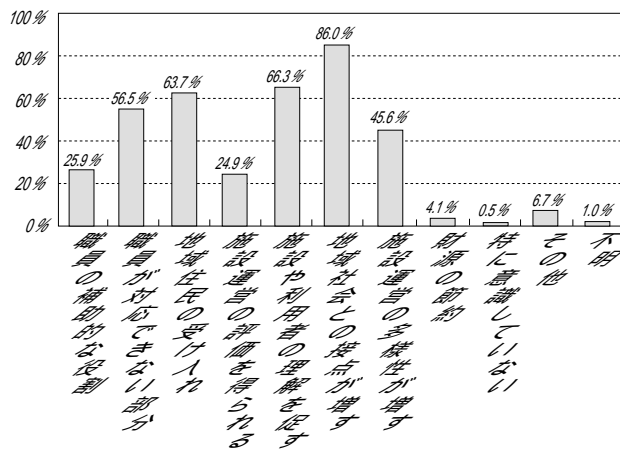
またコーディネーターが抱えている課題は、大きく二つに整理することができます。

(図3) コーディネーター配置の有無によるマニュアル作成状況



一つは、「やってあげている意識がある」「急な来所や休み」「勝手な行動」といったボランティア自身に向けた課題です。コーディネーターが関与してしまうことで、逆にボランティア本来の自主性や自発性を損なわせてしまうのではないかとというジレンマや、活動への施設の期待と、実態とのギャップをどう解決していくか。これは、施設内で受入れのルールが徹底されていない場合や、施設がボランティアに何を期待するのかが明確になっていないため、施設の特徴をきちんと踏まえたうえで、利用者・施設・ボランティアが協働でマニュアル作成やオリエンター

(図4) ボランティア受け入れの目的(高齢施設)



ション、研修会に継続的かつ体系的に取り組むことで、解決に向かうものと思われまます。もう一つは、「ボランティアが集まらない」「定着しない」「コーディネーター

ネットする時間がない」「活動プログラムがマンネリ化している」といった施設体制の課題です。多忙な業務から、新しいアイデアを出すための話し合いの機会や体制作りができず、活動が停滞してしまうといった状況を、どう打破していくかが課題といえます。

ボランティアとの良い関係を作る

施設とボランティアとの良い関係

係を作っていくためには、何よりも、まず「受入れる目的」を明確にすることが大切です。

高齢施設の調査では受入れの目的として、「利用者地域社会の接点が増す」(八六%)、「施設や利用者の理解を促す」(六六・三%)、「地域住民を受入れることで社会貢献ができる」(六三・七%)という結果が出ています(図4)。

このような目的を達成するために、期待するボランティアのイメージをコーディネーターに一任するのではなく、施設長を始め、職場全体で固めていく必要があります。また、チーム制での受入れなど、柔軟に対応できる体制や活動プログラムを丁寧に作っていくことが、施設、ボランティア双方の実りある成果につながっていきます。

今後は、施設でボランティアを受入れるだけでなく、地域住民が集まるサロンとして、またボランティアの活動拠点として、施設を開放していくという視点も必要となってくる。地域の資源を活用する、あるいは施設自身が地域の資源になることにより、サービスの充実はもとより、地域に真に求められる施設となるのではないのでしょうか。

(かながわボランティアセンター)